森の名手・名人シリーズ No.21

名人　志田　成夫(67)　岐阜県飛騨市
聞き手　奥洞　智太　岐阜県立飛騨高山高等学校2年

平成19年取材

「森の名手・名人」とは、森に関わる仕事や地域生活に染み込んだ営みのうち、優れた技をもってその業を極め、他の模範となっている達人で、毎年、全国で約100名が選定されています。岐阜県においては、現在、38名の「森の名手・名人」がいます。
この「森の名手・名人」を「森の、聞き書き甲子園」に参加した高校生が「聞き書き取材」をしたもの中から誌面の関係上要点を抜粋したものです。なお、年齢、住所、学年は取材当時のものです。

茶花・山菜等の採取

山と共に生きる

▼志田成夫さん

1. 自然と関わる仕事がしたい！

卒業して最初に取り組んだのは田んぼやったな。いかにいい米をたくさん作るか。今ほど、おいしい米っていうことじゃなくて、当時はより多く取るという技術をたたき込まれておったので、実際に田んぼで実演するってことは、一つの目標やった。肥料なんかも数少なかったので、自分で配合したり、落ち葉を集めて腐葉土を作った。そして、秋にはその成果が必ず表れてくる。

その後、河合村で畜産。河合村には牧場があったんですよ。牧場といっても当時は山に植林を多くしたでしょ。下草刈るより牛を入れて食べてもらった方がいいと、造林地の中に牛を放牧したの。その管理に12～3年程従事した。

たしか、昭和45年頃からかな。農業や畜産に打ち込む片方で、仕事の切りがついたら、天生(あもう)へもよく行ったんですよ。景色のいい所があって、残雪でビールを冷やして飲んだり、歌ったり、語りあったり、山に自然に向いていきましたね。それに、自分の山は14～5町歩あるし、畑や田んぼも6反くらいあったし、農業試験所時代にえがいた、農業とか林業とかの夢は捨てきれなんだもんで、より自然志向の方を採択してきたの。

2. 山菜

自分の山を歩いとると、まぁ～すんごい山菜に出会うたんよ。これは、もったいないと思って、ひととおり牛の世話をした後、朝はや～く行ってや、ゼンマイやウドやタケノコを採ったりした。ゼンマイなんかでも、ひざをついて、背負う時にやっと立ち上がるくらいの量を大つきな南京袋いっぱいに、半日で2つくらいずつ採った。当時の金で何十万も売り上げたなぁ。

ちょうどその頃、河合村の森林組合が山菜の加工場を始めたの。当初は、ナメコの缶詰を作る森林組合の直営林産物加工センターを作って営業を始めとった。けども、十分に採算合うものは何種類かで、ナメコとか、タケノコなんかは農家の人が小遣いかせぎに採ってきてくれたもんでたくさん集まった。けども、特殊な山菜は、あんまり採りに行ってくれる人がいなかったの。そうすると、その加工場の責任者から「こういう注文が来たで、こういう山菜を何十キロか採ってきてくれんか？」っていう依頼がくるようになったの。それをね、15年くらいやった。

当時は両親がまだ元気やったもんで、家へ帰ってくると、湯にとおせるように、もう湯が沸いとったの。あとは、根気作業で、全部母とオヤジが処理してくれたもんで、僕は採ってくるだけでよかったの。で、両親がいなくなってから、僕と家内だけやもんで、やっぱ山菜やるには、手伝ってくれる人が確保できんとなかなかできないですね。だから、今は、本当に高級な料理屋さんとか、行政の方で贈り物にしたいという場合の少量の注文は受けるけど、大量に出荷する方からは撤退しとるの。

3. 山の恵み

山菜や畜産から撤退して、無理のない範囲内で、自分一人でできる仕事を模索して、新しく取り入れたのが、生け花に使う華材。造林地の下刈りに行った時に、当時は名前さえも知らんような木でも、「これ、花が咲きそうな変わった木やなぁ～」とか「何かに使えそうだ」と思ったら全部刈らないで残したわけ。それを、50㎝位で切って、注文に応じて30本とか50本の束にして出荷するようになって今年でちょうど19年目。

最初はね、個人個人の問屋さんとか、大手の花屋さんに注文もらっていたの。でも今は、高山とか古川の花屋さんからの少しずつの注文は時々運んでいますけど、はや個人個人に配達するような労力がないもんで、富山の中央市場に出荷している。僕の場合は個人出荷の利点っていうものを100％生かしきるってのがあるんやさ。注文がちっちゃい小低木になると、僕みたいな直接運んでくれる農家へ注文が来るんやさ。そういう大量流通にのらん品目とかをターゲットにするっていうのも個人出荷の、1匹狼でやる山オヤジの生きる道やと思うの。だから、生き残ってきたんや。

それに、山にある物に余分な物は一切ない。ゼンマイやウドとかは山菜として大事やし、茶花にならん物も、普通の生け花とか、つまようじの材料になったり、何か必ず生かせる道があるもんで利用しようと思ったらふんだんにある。特に秋は天然のキノコとか、木の実とかも～う宝の山！だから、山村の暮らしとか、林家のさりげない暮らしの中で、豊かな味わいというものにマッチした精神というか、人間性というものを僕は重ねていきたいの。

4. 山を守る

天生のパトロールが始まったのは30年くらい前で、パトロールが定着しとるのも天生なんですよ。パトロールは、天生県立自然公園の範囲内。高山植物を取っていく人がいるもんで、パトロールが毎日2人いるんやさ。天生の山は、県立公園になる前から好きだったし、声かけてもらってずっと管理してきました。それに今年、屋久島の人とか、愛知県の葦毛湿原の人が、「天生の管理の状態とかパトロールの状態とかが素晴らしいので、参考にしたいから見して下さい」って、おいでになったんですよ。だから、自分達が関わってきた天生の管理ってものは、よかったのかなぁ～って今喜んどるの。

うれしいのは、天生に来た人が、良かったって下山していかれることかなぁ。「よかったです。ありがとうございました。また、来年ミズバショウの季節に来させてもらいます」って言って帰られる。それをまた来て下さいって声かけて見送る時が、携わってきた者の最高の喜びやな。天生には、本当に山が好きな人ばかり来るもんで、ここの関係者はみんな生き生きしとるの。仕事の段取りなんかもよく気がつくんやさなぁ。毎日毎日、天然の恵みを利用させてもらっとるもんで、ここに来るということに対しては、経済とかを除外して、山への恩返しみたいな形で、守っていこうって山なんですよ。

5. 自然を伝える

これが難しいんですが、伝えようと思っとることは誰にも負けんつもりで持っとるの。今年も小学生の全校登山も案内したし、地元の中学校の登山で山頂まで連れて行ったの。小学生の場合ですと、いきなり難しい植物学を語ってもなかなか理解してもらえないから、まずは漢字の成り立ちの様なことからお話させてもらうの。「天生のブナの木はまん丸いんですよ。たぶん、風の抵抗を受けないように丸く進化したんだと思うんですけど、もしブナの木が四角やったら、風の抵抗を受けるでしょ？だから、国がまえの中に木という字を入れると、木は四角では困るという字になる」という解説をすると、納得してもらえて、みんな喜んでくれるの。だから、ひと口にガイドといっても、年齢に応じた解説ができなければダメだと思う。

天生のブナは、大きいものは何百年も経っとって、どんな苦労にも、どんな寒さにも、どんな豪雪にも耐えてきとるんやさな。そういうようなことを、人生の荒波とだぶらせてみたり、山を歩きながら人生と重ねるとか。だから、一番の目標は、自然の中で人に迷惑をかけないで、なんとか生活していける程度の生活をいとなむことですね。だから、僕はガイドする時も、なるべく大きな声では解説しない。山は静かだからいいという人もいるので、「しみじみと自然を語る」「自然を味わう」ことを心がけてみたいと思うの。

6. 森林セラピー

僕は何十年も関わっとるんやけど、やっぱ天生は癒しの森。気管支なんかの病気をわずらってみえた方とか、どうも寒くなるとぜんそくが出てダメだっていうような人は、夏場の新緑の茂る時に散歩したりすると、自然に治るかまではわからんけど、やっぱ健康になるという。特に、ドイツの方では森へ連れて行って体調を整えさせて、回復へ導く療法の一つとして新緑クナイプ療法がクローズアップされとる。

日本でも、毎日パソコンに取り組んでる人とかって、いっぱいみえるでしょ？そうすると、精神的に疲れる、目が疲れるとかっていう人が出てきて、おのずと新緑の山を歩いて疲れを癒そうとか、ゆったりと過ごしたいとかっていう人が必ずいると思うし、これからどんどん多くなるんじゃないかなぁと思うの。

7. これからの期待

あまりにも今、儲かるか、儲からんかとか、そういう人達が多くなって、「自然を大切にする人が増えて欲しい」という思いでいるってことは確かです。大勢の町の人たちの中で、大勢の若者の中で、自然な状態で一人一人が自分の適性を、一人一人の判断で、若い時代にはとりあえず就職して、きっちりとした定職で頑張ったいけれども、ある程度の年齢に達したら「よし、僕も自然な方向へ」という自然志向の若者が自然な形で増えるってことには期待しとるな。

名人　志田成夫(しだなりお)さんのプロフィール

- ●生年月日：昭和15年2月23日生まれ
- ●出身地：岐阜県飛騨市河合町(旧：高根村)
- ●職業：茶花・山菜等の採取

7人兄弟の長男として生まれる。昭和27年に岐阜県農業試験所を卒業してから自ら農林業を営んでいる。平成2年度には天生県立自然公園協議会の公認ガイドに就任。さらに、植物を採取するだけでなく地域の伝統や文化を伝える活動も行っている。

※原本は長文のため、文章の一部を割愛しています。

【森の名手・名人編集担当
(社)岐阜県緑化推進委員会　佐藤正吉】